

# わたしたちにできること



震玉小玄間で止まっていた時計は最初の地震の時間です。

## 保護者のみなさまへ～ 「いのち」の話を してください

大きなゆれに、自分の命が危険にさらされる感覚、そして、テレビで見た大切な人を失う悲しみは、保護者のみなさまがかみ砕いて話してあげること、子どもたちの中でひとつになり、「いのち」の大切さについてあらためて考えることになると思います。保護者のみなさまがこれまでに経験した大切な人との別れの気持ちを話してあげてください。

予想すらできなかった惨事が私たちの近くで起こりました。幾度となく起こる余震に、おびえる子どもたちの肩を抱きはげます・・・そんなこともあったのではないかと想像します。

緊急連絡等も時間帯を選ばずという状況になり、保護者のみなさまのご協力が大きな支えとなりました。本当にありがとうございました。

ただニュースを見ていて、あるいは安否確認の県外からの電話で話をしているのは、私たちが体験した怖い思い、眠れない緊張感、避難の体験などと、家が倒壊した、家族や親族がこの世からいなくなったことは同じではないということです。確かに、私たちも大変だったかもしれない、しかし、私たちの近くに、もう取り戻すことのできないものを失った人たちがいるということ、これは私たちが考えなければいけないことです。

子どもさんとしっかり考えることが大切かと思えます。

## 児童のみなさんへ～感じたことを行動につなげましょう

大きなゆれを体験して思ったこと、を心にきざみましよう。

またテレビのニュースなどで、家がこわれた人、大切な人を失った悲しみにくれる人、ふるさとの町がこわれ悲しむ人たちの映像を見たと思います。「自分じゃなくてよかった」と思っている人はいないと思います。でも、感じた心は行動にうつすことが大切です。

久玉小児童会では、「募金活動」に取り組みます。素晴らしいことです。金額の大きさじゃないです。「がんばれ」の気持ちを形にしましょう。

## 久玉小スタッフは～ より精度の高い 安全体制を 整えます

今回メール連絡のあと、返信の確認、電話連絡で全員連絡が取れたことを確認することができました。ずっと脳裏には学校アンケートの「携帯の連絡だけでは不安だ」という意見がありました。ご意見参考になりました。ありがとうございました。また休校の際の子どもだけの在宅の不安についても、今後いい解決方法を考えていきたいと思えます。

## Bigriver's tweet～校長室より～



4月8日、一つ上の学年に進級した子どもたちが希望に胸を膨らませ元気に登校しました。始業式では新しい1年のスタートにあたって、私がこんな学校になったらいいなと目標を立てたことを話しました。その目標が、「一人一人が夢を持ち、一人一人が主役になる楽しい学校」です。そのために、子どもたちに大切にしてもらいたいことを3つ話しました。

1つ目は、「学校で勉強したことは、毎日の生活の中でどんどん使うこと」です。学校は、本を読んだり、字を書いたり、計算をしたり、調べたり教科の勉強をします。また、友だちと仲良く遊んだり、困ったときは助け合ったりする心の勉強もします。勉強したことはどんどん使ってほしいと思います。

2つ目は、「『ありがとう』の言葉を心を込めて言えるようになること」です。地域には、子どもの安全を見守ってくださる人や子どもたちが困らないように手を貸してくださる人がいます。学級や学校でも困っていると声をかけてくれる友だちがいます。「ありがとう」は、自分も周りの人も幸せにしてくれる魔法の言葉です。たくさん使えるようになってほしいと思います。

3つ目は、「自分でできることは 自分ですること」です。そうすれば、できることが少しずつ増えていきます。できなかったことや苦手なことができるようになる喜びをいっぱい味わってほしいと思います。主役になるためには努力が大切です。私たちは努力を惜しまない久玉っ子を応援していきます。

Bigriver's tweet

## いい言葉は心にひびく

あの大きな災害は本当だったのか、今でも信じられませんが、神戸で募金活動をした時に「前は私たちが助けられたから、今回は私たちが助ける」と声をかけてくださいました。

今、日本中が東北、そして震災をうけた方々を応援し、全力で支えあおうとしています。今、スポーツの域を超えて、野球の真価が問われていると思います。見せましょう。野球の底力を見せましょう。野球選手の底力を見せましょう。野球ファンの底力を見せましょう。共に頑張ろう東北 支えあおう日本

(以下略)

私は、災害の際には、家族の名前で募金をするようになっています。知らんぷりをしています。という意思表示です。また、数年前の広島土砂災害を見て、ユニボの資格を取りました。定年退職後被災地にユニボを持って行けば何かの役に立つと考えたからです。私たちに何ができるか、家族で考えると、子どもはまた成長すると思えます。